東京外国語大学 博士学位論文 Doctoral thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

第１部　植民政策学の時代

第１章
植民地時代のマレー研究

マラヤが独立する以前の研究は、植民地時代の研究としてひとくくりにされる傾向がある。しかしながらこの時期は《地域研究》と国民的「主体」形成とのかかわりでいうと、拠点支配から領域支配へとという植民地支配の性格の変化によって二つの時期にわけて考えた方がよいかもしれない。サイードが《オリエンタリズム》の出発点を18世紀末に設定しているように、本論文が考察する地域におけるヨーロッパ人たちの研究の集積もおおよそのところ18世紀末にはじまっているとみてよいだろう。この18世紀末から19世紀末までのヨーロッパ人による拠点支配の時期を第一の時期と考え、19世紀末から第二次世界大戦期あたりを第二の時期と考えてみよう[1]。すると、分析する対象の空間的ひろがり、どのような観点や関心から対象を分析するかなどにかんして、二つの時期のあいだに相違があることがわかる。

結論をさきどりしてしまえば、国民的「主体」形成をもたらすためのさまざまな装置は、この地域にかんしてはほとんどの場合において第二の時期に展開されることになる。たとえばそれらは、国民的な空間のひろがりにかんする認識方法、国民史もしくは一国史を可能とする通史という歴史叙述のしかたの成立、国民「主体」形成のための参照項ともいうべき人種カテゴリーの登場と展開、さらには「民族語」や「国民語」という発想を可能にする統一体としての「言語」という認識の方法である。もちろんそれらの登場は時期的には前後することもあったが、領域的な植民地統治をとおして広がっていくことになったといえるだろう。

以上のように、本章では植民地時代の研究から、植民地の空間、時間、人々、言語にかんするいかなる知が制度化されたのかを読み解いていく。第１節では国民的

[1]今回は日本軍政時代について調べることができなかった。《南進論》から軍政時代を経て、戦後の《地域研究》へといたる「南」にかんする知識と研究の蓄積と近代日本の「主体」形成については、これからの課題としたい。

な想像を可能にする装置について一般的な考察をおこなう。第2節では、植民地における地理にかんする知の枠組みの変化を追う。第3節は、自然誌ないしは博物学的な記述が通史という歴史叙述の方法によってとってかわられるありさまをみる。第4節においては、「人種」カテゴリーの登場と、それが植民地マラヤにおいてどのように展開されたのかを論じる。第5節は「一つ」の民族が「一つ」の閉域化された言語をもつという、言語にかんする観念の成立のもとで、「マレー語」という言語が「一つ」の言語として認識され、研究されるありさまを分析する。

第1節　国民的な想像を可能にするもの

1　近代における文化的人造物としての国民

ベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』（1983年）において、国民が歴史的な概念であること、自然にそこにあるのではなく、どんなに古そうにみえる国民であっても、歴史的に人工的につくられたものであることを指摘している。とりわけかれはナショナリティとナショナリズムを《文化的人造物 cultural artefacts》であるとして以下のようにいう。

> わたしの理論的出発点は、ナショナリティ、あるいはこの言葉が多義的であることからすれば、国民を構成（ネーションネス）するということと言ってもよいが、それがナショナリズム〔国民主義〕とともに特殊な文化的人造物であるということにある。ナショナリティとナショナリズムが文化的人造物であること、これを正しく理解するためには、それがいかにして歴史的存在となったか、その意味が時とともにどのように変化してきたか、そして今日、なぜそれがかくも深く情念を揺さぶる正統性をもつのか、これを深く検討する必要がある。
> (Anderson 1991:4)

アンダーソンは、ナショナリズムを《文化的人造物》とする見解において、アーネスト・ゲルナーの国民論に共通性を見いだしている。ゲルナーによれば、「ナショナリズムは国民の自意識の覚醒ではない。ナショナリズムは、もともと存在していないところに国民を発明すること」(Gellner 1964:168)である。

しかしながら、アンダーソンも指摘するように、ゲルナーは国民共同体をねつ造されたものであるとし、人工的ではない自然な共同体、アンダーソンの言葉を借りれば「真の」共同体が存在するということを結果的に主張してしまっている。

同様のことは、エリック・ホブズボウムによる《伝統の創造invention of tradition》という概念にもみることができる。ホブズボウムは、テレンス・レンジャーとの共編による『伝統の創造』（1983年）の序論において、一般的には遠い昔から受け継がれてきたと考えられている「伝統」の多くが、じつは近代になって人工的につくりだされたものであるということを、鮮やかに描いてみせた(Hobsbawm:1983)。だが、ゲルナーと同様に、ホブズボウムもすべての「伝統」が近代の産物であるとはいわず、遠い昔から受け継がれてきた真正な伝統もあるという。

人為的なものと本質主義的なものがあるとするゲルナーやホブズボウムにたいして、「日々顔突き合わせる原初的な村落より大きいすべての共同体は（そして本当はおそらく、そうした原初的村落ですら）想像されたものである」(Anderson 1991:6)というように、アンダーソンはすべての共同体が想像を媒介としており、原初的ではないという立場をとっている。アンダーソンにとっての共同体における人為的な性格は、近代と前近代に共通しているようだが、国民共同体をとりあげるとき、それは近代における文化的人造物であるということになる。それというのも、近代においてはじめて国民のような共同体を想像するための要件がととのえられてきたからである。国民を想像するための要件とは、時間と空間にかんする認識のしかたの変化である。それはアンダーソンによれば、聖なる共同体、聖なる言語、血統が衰退していくなかで起こりつつあった、世界理解の様式とくに時間了解の根本的な変化であった(Anderson 1991:22)。

アンダーソンは、近代以前の時間と空間の概念において、「歴史を原因・結果の無限連鎖、あるいは過去と現在との根底的分離と理解することとは全く無縁」

(Anderson 1991:23)であったことを指摘する。エーリッヒ・アウエルバッハやヴァルター・ベンヤミンを引用しながら述べるには、近代以前においては「いま」と「ここ」とは、「これまでもずっとそうであったこと、そして同時に、未来にも成就されるであろうこととなり、厳密にいえば、神の眼前において、永遠のもの、恒常のもの、地上の断片的な出来事においてすでに完成されたもの」(Anderson 1991:24)であり、「即時的現在における過去と未来の同時性」(Anderson 1991:24)である。

こうした中世の時間軸に沿った同時性の観念にとって代わった新しい同時性の観念を、アンダーソンはふたたびベンヤミンの言葉を借りて、「均質で空虚な時間」の概念と呼ぶ。そこでは、「同時性は、横断的で、時間軸と交叉し、予兆とその成就によってではなく、時間的偶然によって特徴づけられ、時計と暦によって計られるものとなった」(Anderson 1991:24)。このような新しい同時性の観念を生みだしたのは、商品としての出版物の発展、アンダーソンのいう《出版資本主義》の発展であった(Anderson 1991:37)。この同時性の観念の創出をもってはじめて、「水平・世俗的、時間・横断的」なタイプの共同体を想像することが可能になったのである。もちろん、それがただちに国民共同体を生みだしたのではない。そこにはさまざまな偶発性が介在したことをアンダーソンは指摘している。

また、注意しなければならないことであるが、アンダーソンが《出版資本主義》によっていおうとしていることは、出版物がポピュラーになったことによってナショナリズムのプロパガンダが津々浦々に流通し、人々がそれらによってナショナリズムを刷り込まれたということ、いわゆる《上からのナショナリズム》ではない。《出版資本主義》によってもたらされたのは、国民を想像する条件である時間と空間の概念の変化である。時間と空間にかんする認識の変化がなければ、国民のようなタイプの共同体を想像することが不可能であったと、アンダーソンは述べているのである。

さて、近代的な時間と空間の概念の変化を背景として可能となったある種の想像は、物質性をもっていなければならない。すなわち、制度や装置をとおして現実化されなければならない。そうでなければその想像はたんなる空想である。アンダーソン自身は、この点についてじゅうぶんに展開しているとはいえない[2]。しかしな

[2]たとえば酒井直樹による批判を参照のこと(酒井1996:279)。

がらたとえば、改訂版の第10章では、植民地政府が作成したセンサス、地図、博物館が、植民地主義的な認識の枠組みのもとで、植民地支配下の地域のその後における民族的ないしは国民的な想像を現実のものにしていく装置として機能したことを分析している。アンダーソンは、アジアやアフリカの植民地世界におけるナショナリズムの直接の系譜は植民地国家の想像のしかたに求められるべきであろうと述べる。19世紀の半ば以降、植民地国家のイデオロギーや政策の下敷きにはある特定の文法があるという。この文法をもっともみごとに浮き彫りするものが、19世紀半ばまでに発明され、植民地の領域が複製技術の時代にはいるとともに、その形と機能を変えていった権力の三つの制度、すなわちセンサス、地図、博物館である(Anderson 1991:163~164)。

> センサス、地図、博物館は、こうして、相互に連関することにより、ポスト植民地国家がその領域について考える、その考え方を照らし出す。この考え方の「縦糸」をなしているのは、すべてをトータルにとらえ分類する格子 grid であり、これは果てしない融通性をもって、国家が現に支配しているかもしくは支配することを考えているものすべて、つまり、住民、地域、宗教、言語、産物、遺跡等々に適用できる。そしてこの格子の効果はいつでも、いかなるものについても、これはこれであって、あれではない、これはここに属するものであって、あそこに属するものではない、といえることにある。それは境界が截然と区切られ、限定され、したがって原則として数えることができる。〔中略〕またこの考え方の「横糸」はシリーズ化 seriarization ともいうべきもの、つまり、世界は複製可能な複数からなるという前提である。特定のものはつねにあるシリーズを暫定的に表現しているにすぎず、またそうしたものとしてあつかわれる。(Anderson 1991:184)

近代植民地主義のイデオロギーを下から支えているこの文法のもとで、さまざまな差異やさまざまな断片は分節化され、重複したりあちらとこちらにまたがったりしないように格子上に厳密に分類される。この文法ないしは知の枠組みは、人種、言語、地理、歴史などにかんする学として制度化され、アンダーソンがいうように

センサス、地図、博物館などの装置に反映されるのである。以下では人種、言語、地理、歴史にかんする学の形成について見ていこう。

第2節　「マレー諸島」から「マレー半島」へ

1「マレー諸島」という空間

イギリス人によるマレー研究がさかんになりはじめた18世紀末から19世紀のはじめは、イギリスがオランダにたいして、東インド諸島における勢力の巻き返しを図り始めた時期である。イギリスは1623年のアンボイナ事件を契機にオランダとの勢力争いに敗れ、いまでいう島嶼地域における競争からほぼ撤退していた[1]。それ以降は、1685年にスマトラ島のベンクーレンに開かれた商館だけが、この地におけるイギリスの唯一の拠点であった。ところが、1791年にフランシス・ライトがケダの王とのあいだに条約を締結してペナンを領有して以来、イギリス勢力はオランダ勢を脅かすようになる。イギリス東インド会社は、1795年にはマラッカを占領、1800年ペナンの対岸ウェズリー地方を獲得、1811年にジャワを占領し、1819年にはラッフルズがシンガポールを領有した。ついに1824年に英蘭協定が結ばれ、イギリスとオランダの勢力範囲に境界線が引かれる。その結果、マラッカはイギリスに、ベンクーレン、リアウ、リンガはオランダの勢力範囲となった。

現在の研究者たちは、第一の時期における研究とわたしが便宜的に呼んでいるこれらの研究を、一国研究の枠組みのなかでの《マレーシア研究》や、《マレーシア研究》のなかの一分野としての《マレー研究》の研究史の範囲内に設定してしまい、それによって過去においてこれらの研究がおかれていた文脈を無視してしまうこと

[1]19世紀より前のヨーロッパにおける《マレー研究》のセンターがオランダであったということは、この地域におけるオランダの圧倒的優位と密接にかかわっているといえるだろう。このことは、19世紀のイギリス人の研究者も指摘していることである(Marsden 1812:axxxvii)。「マレー」にかんする知の成り立ちをオランダの初期の研究から検討していくことは、もちろん重要なことであるが、オランダ語の著作を検討することは筆者の能力をはるかに越えている。論文で問題にしている領域がのちにイギリスの植民地となり、この地にかんしての研究ではその後イギリスが圧倒的な力を見せたことも考えて、この論文ではイギリスの研究を中心に見ていくことにする。

がしばしばある。しかしながら、19世紀はじめの研究者たちが見ていた地域的な広がりとはどのようなものなのだろうか。それはもちろん現在の地政学的認識における「マレーシア」でも「インドネシア」でもなく、ましてや東南アジアでもなかっただろう。

たとえばライデンは、19世紀はじめに現在の東南アジアにほぼ相当する地域を《インド・チャイナ》という呼称を使って示している。ライデンには《インド・チャイナ》が内部に差異を抱えているとはいえ、一つの論文の中で扱うことのできるまとまりとして見えていた。「インドと中国のあいだの地域の人々は、多数の部族に分割されており、言語や文化の点において同様に差異があるであろうが、程度の差こそあれ、インド・チャイニーズという言葉によって的確に特徴づけられるだろう」(Leyden 1808:158)。ライデンによれば、《インド・チャイナ》はインドと中国という偉大な二つの大文明に挟まれた地域であり、内部における差異は、二つの文明の受容の時期や程度によってもたらされるのだという(Leyden 1808:158)。

ライデンの関心が現在でいう東南アジア地域にほぼ相当する地域であったのにたいし、ラッフルズの関心はライデンの分類でいう多音節語が優勢である島嶼部に向いていた。ライデンがこの地域の一体性を積極的に評価しなかったのにたいして、ラッフルズはこの地域の人々を「マラユ民族」と呼び、「一つの言語を話す一つの人々」として見ようとした[2]。「わたしはマラユ民族を、一つの言語を話す一つの人々として考えざるをえない。もちろんかれらは、広い空間に散在してかれらの特徴と慣習を維持しており、その範囲は、スールー海と南部の海洋とのあいだに横たわる海岸部諸国のすべてにわたり、経度的にはスマトラ島の西部とパプアもしくはニューギニアで区切られている」(Raffles 1816:103)。

ラッフルズと同様に、マルスデンにもマレー語が一体的なものとして見えていた。マルスデンは、マレー語の広がる地域が東インドと呼ばれている地域に相当していると述べ、その広がりを「マレー半島とスマトラ、ジャワ、ボルネオ、セレベスの島々とその他数え切れないほどの島、東は香辛料諸島と呼ばれるモルッカ諸島、南はティモール島、北はフィリピン諸島を含みマラヤン諸島を形成している」

[2]ラッフルズ論文でMalayuと表記されているものは、現在Melayuと表記されているものと同じものを指すようだ。マルスデンの辞書のはしがきでは、英語でのthe Malayanが「ネイティブ」たちの言葉でMalayuに相当することが示されている。

(Marsden 1812: i)地域であると定義している。

ラッフルズやマルスデンと並ぶ初期の重要なマレー研究者としてあげられるジョン・クローフォードは、《インド諸島》地域を分析の対象としている(Crawfurd 1820)。《インド諸島》は、マレー半島とスマトラ島を西の境界とし、東はニューギニア、ギロロ、ミンダナオ、ルコニアまで、北部はルコニア、パラワン、ボルネオを境界としている地域である(Crawfurd1820:5-6)。この地域の広がりは、ラッフルズのいうマラユ民族の分布地域やマルスデンのいうマレー語の広がる地域である東インドにニューギニアをくわえた地域である。

進化論で有名なイギリスの博物学者であり探検家であるアルフレッド・ウォーレスは、1854年から1862年にかけて《マレー諸島》の各地を探検し、この地域の動植物だけでなく人種についても重要な考察を残した(Wallace 1986)。ウォーレスの考察地域である《マレー諸島》は、「マレー半島のテナッセリムから西はニコバル諸島、北はフィリピン諸島、東はニューギニアを越えてソロモン諸島まで」(Wallace 1986:14)である。ウォーレスのこの地域区分は、動植物と人種についての分布図にもとづいたものだった。

以上のように19世紀はじめの研究者たちは、現在のマレーシア、インドネシア、フィリピン、ときにはニューギニアやソロモン諸島をふくむ地域を空間的な枠組みとして考えていた。それは、オランダ、イギリス、スペインなどが勢力争いを繰り広げていた地域である。以上にあげた研究が、ウォーレスを例外として、19世紀のはじめの二十数年間に発表されているということも見過ごしてはならないだろう。この時期とは、イギリスがオランダ勢力の優勢な島嶼地域において巻き返しをはかり、オランダとのあいだに協定が結ばれる1824年までの、事態が比較的流動的であった時期である。マルスデンやラッフルズの前には、オランダの勢力の優勢な地域がイギリス支配に変わる可能性とともに広がっていたのだろう。また、この時期は港を中心とした拠点支配が優勢で、領域支配が本格化していない。研究者のまなざしが海を隔てたいくつもの島々をむすびつけていたのは、拠点支配に起因しているからかもしれない。

おそらくこの時期の研究者たちは、それから一世紀のちのイギリス人研究者によるマレー論がマレー半島内だけで展開することになるなどとは思いもよらなかった

だろう。マレー研究者であり、かつ植民地官僚であったウィルキンソンが20世紀のはじめに編集した、はじめての総合的なマレー研究である『マレー研究論集』では、マレー半島をマレー研究の分析の単位として採用することにたいしていかなる問題もいだかれなかったのである。

2 「マレー半島」という空間の誕生

英蘭協定以後、イギリスはマレー半島における支配をじょじょにに拡大していく。1853年には東インド会社は解散し、1873年にはペナン、マラッカ、シンガポールの三つの海峡植民地の植民省による直轄支配が始まった。その翌年、イギリスはパンコール条約のもとに理事官をペラに設置する。スランゴール、スンゲイ・ウジョンなどもつぎつぎとイギリスの保護国となり、マレー半島はしだいにイギリスの勢力圏となった。これを機に、研究者たちの目もイギリスの勢力範囲であるマレー半島へと注がれるようになる。

研究者たちがマレー半島を一つの単位としてみなすようになるというこの傾向がもっともはじめに表明されたのは、スウェッテナムの『英領マラヤ British Malaya 』（1906年）においてであろう。『英領マラヤ』の冒頭の叙述は印象的である。それはまるでペナン島からマラッカ、シンガポールとマレー半島の西海岸を南下していく船に乗りこんだ旅人の目に映る風景のようである。旅人が見るのは、海峡植民地とマレー連合州そしてイギリスの保護下のいくつかの州といずれイギリスの保護に入るであろう諸州からなるマレー半島の風景である(Swettenham 1929:1-11)。『英領マラヤ』は、イギリスのマレー半島における行政の進展を歴史的に記述することを目的とし、その当時の英領マラヤをイギリス統治以前から連続的に記述するという方法をとっている。その意味でこの著作は、英領マラヤにかんする《通史》としても読むことができる。

《英領マラヤ》という空間を分析の単位とすることにたいして、スウェッテナムはあまり不都合を感じていなかったようである。それは、第７章におけるかれのマレー人論にもみてとれる。第７章においてマレー人論を展開するさいに、スウェッテナムは、衣食文化、婚姻制度、土地制度、言語や文学など、およそマレー人にか

んするかぎり、ありとあらゆることを話題にしているが、マレー人と呼ばれる人々の居住範囲がマレー半島以外に広がっていること（少なくとも数十年前にはそのように描かれていたこと）にかんしてはずっと沈黙したままである。この描き方はある意味で、現在の《マレーシア研究》とも共通するかもしれない。そこでは、インドネシアやタイの南部にもマレー語を話す人々がいることなどはふつう記されていないし、読者の方もそのような説明を期待していない。現在の《マレーシア研究》の執筆者と同じように、スウェッテナムはマレー人世界の広がりが半島を越えていたことを知らなかったわけでも否定したかったわけでもなく、そうした説明を必要と感じなかったのである。パンコール条約から約30年がたった当時のスウェッテナムの目には、マレー半島という空間がそれだけ現実的な意味を持った単独的な空間としてすでに映っていたのである。

第3節　自然誌から通史へ

1　自然誌としての歴史

近代的な意味での歴史学の成立が19世紀であることを考えれば、18世紀末から19世紀前半にかけての時期に、この地域にかんして描かれた"history"が、現在のわたしたちの認識における「歴史」と異なっていたとしても当然であろう。このような"history"の代表としてとりあげられるのは、ジョン・クローフォードによる『インド諸島の歴史』や、ウィリアム・マルスデンによる『スマトラの歴史』である。

たとえばマルスデンの『スマトラの歴史』は、スマトラの地理、鉱物、動植物についての記述、スマトラに居住する人びとの言語の分類、生活習慣までをもふくんでいる。『スマトラの歴史』の再版によせたバスティンの解説にもあるとおり、この作品は現在でいう歴史学の境界線をこえている。この意味においてこの作品は、自然誌の伝統に立脚していたといえるだろう。近代的な歴史学の範疇をはるかに越えていながら、この著作が近代的であるとバスティンがいうのは、「この作品が勝手な想像力による陳列ではなく、物事をあるがままに記述し、事実をきちんと規則

正しく並べ」(Bastin 1986:viii)ているからである。バスティンが近代性をいかに定義しているのかは定かではないが、事物をあるがままに記述し規則正しく陳列しようとするこの態度は、歴史学というよりはむしろ、リンネの植物の分類以来の近代的な自然誌の流れをくむものだと考えることもできる[3]。リンネが18世紀のなかばに植物の画期的な分類法を発表して以来、その弟子たちは世界中の土地へ赴き、ありとあらゆるものを分類した。人間も例外ではない。人種の分類をはじめて試みたのはほかならぬリンネである。スマトラに生息する動物や植物にたいしてと同じようなまなざしで、マルスデンはスマトラに住む人々の生活を眺めていたといえるのではないだろうか。こうした博物学的なまなざしは、もちろん19世紀はじめの研究のみに特徴的なことではない。しかし、この地域にかんしての自然誌としての歴史研究は、19世紀後半になると姿を消す。19世紀末になると歴史はむしろ時系列的な通史として描かれるようになるのである。

2 「マレー半島通史」の誕生

第2節において領域支配への移行が、学問研究における空間的な分析単位の変更をともなったことをスウェッテナムの『英領マラヤ』を例にとって指摘した。『英領マラヤ』の翌年に第一シリーズの出版が開始された『マレー研究論集*Papers on Malay Subjects*』は、スウェッテナムによって示されたこの傾向をさらに前進させているといえる。『マレー研究論集』はマレー半島を分析の単位としたはじめての総合的なマレー研究書である。これは植民地政府の役人でありかつマレー研究者であったリチャード・ウィルキンソンによって編集され、文学、法、生活文化、産業など多岐にわたる項目を網羅している。『マレー研究論集』はマレー半島が分析の単位となっていることについてとくに説明をあたえていない。『マレー研究論集』は、マレー人にかんする議論の舞台が当然マレー半島であることを読者が自明の前提として受けいれ、了解していることを期待している。

マレー半島が意味を持った空間として認識されてきていることは、『マレー研究

[3]これはミシェル・フーコーが『言葉と物』において指摘している同一性と相違性にもとづいてものの秩序を形成する方法としての古典主義時代のエピステーメーと重なっているといえよう。

論集』においてマレー半島の通史を描くというプロジェクトが達成されたことに見てとれる。通史は、ある「民族」ないしある「地域」を時系列的な発展を遂げてきた有機的な統合体としてみることによってはじめて成立し、また同時に、通史という装置によって、ある民族なり地域なりの統合性は定立され強化されるといえるだろう。したがって、マレー人の通史を描くという作業は、あらかじめ「マレー人」という存在を歴史のなかに前提することによって成立する。つまり、実証作業に論理的に先行して「マレー人」が存在しているという前提条件がないかぎり、通史は書けないのである。すなわち歴史資料の中に「マレー人」を同定しようという実証的な作業を可能にするのは、「マレー人」がその作業に先行して存在するという前提によるものであり、この作業によって、「マレー人」は均質で一様な統一体として構築されるのである。

この議論にしたがうと、『マレー研究論集』の歴史の部に収められているウィルキンソンによる論文「半島マレー人の歴史」は、マレー半島を、その他の「マレー人」の居住地区であるボルネオ島やスマトラ島から切り離し、自己充足的な閉じられた空間として構築する作業の一つであるといえる(Wilkinson 1971)。そしてその作業は、半島の「マレー人」を統一体として見ることによってはじめて可能になる。もちろん、歴史家たちはスマトラやボルネオに住む「マレー人」と呼ばれる人々の存在を忘れてしまったわけではないだろう。また、かつてマレー半島とスマトラ島の双方に影響力をもつ国家が存在したことを無視しているわけでもないだろう。しかし、ひとたび「半島マレー人」の歴史という主題がうち立てられると、半島の「マレー人」とボルネオの「マレー人」、スマトラの「マレー人」は、同じ「マレー人」であっても別々の歴史を持った人々の集団として考えられてしまう。また、そのように考えられるからこそ、「半島マレー人」の歴史という主題が立てられるのである。

もちろん、当時のマレー半島内において統一した国家が存在したわけではない。むしろ、半島には複数の王国が並存していた。しかし、「半島マレー人の歴史」という主題のもとでは、それらの並存する複数の国家は「マレー人国家」としてひとまとめにしてあつかわれることが可能となる[4]。

[4]ウィルキンソンによるこの通史の伝統は、独立後の「マレーシア人」の歴史家による国史にも受け継がれている。たとえば、ザイナル・アビディン・アブドゥル・ワーヒッド編『マレーシアの歴史』

「半島マレー人の歴史」は、マレー半島というかぎられた空間を舞台にした歴史叙述であり、マレー半島につぎつぎと起こる事件が時間軸にそって記されている。もちろん、ただ、漫然と事件が年代順に並べられているわけではない。最初はマラッカ王国の繁栄、ついでポルトガルによるマラッカ占領とマラッカをめぐるジョホール王国とポルトガルの攻防を中心とした歴史、そしてオランダによるマラッカ占領である。マラッカ王国と同様に「マレー人」の王国であるアチェやパサイは、マレー半島に基盤をおいた王国とはみなされず、マラッカ攻防などで関係するときのみ名前が登場するにとどまる。オランダのマレー半島に対する覇権に翳りが見えるころから、記述はおもにイギリスの利害が関係した事件や地域を中心に展開される。これらの中心のまわりにマレー半島各地の王国をめぐるさまざまなことがらが有機的にむすびつけられて、「半島マレー人の歴史」は形成されている。

もちろんマレー半島の歴史は、なかなか理想どおりにはいかないものである。歴代の王国の勢力範囲は必ずしもマレー半島という枠内におさまるものではなかった。マラッカ王国時代のように勢力範囲が半島を超えて拡大したり、マレー半島の一部や大部分がマレー半島以外の地域からの勢力圏にはいることはたびたびあったはずである。しかしながら、こうした事態もマレー半島の歴史という主題にたいする致命的障害にはならない。マレー半島の歴史という主題がうちたてられるやいなや、こうした事態にたいしては以下の解釈が施されることになる。すなわち、前者の場合はあくまでも中心は半島でありそこから支配圏が拡大したとされ、後者では外来のものに支配されたと解釈されるようになる。

このように19世紀末から20世紀の初めにかけてマレー半島は意味をもった空間として認識されるようになる。このような空間認識が植民地統治におけるさまざまな

(1983年) では、19世紀のマレー半島をいかにあつかうかという問題にたいして担当執筆者は以下のように記している。「実際のところ、19世紀初頭の段階では、マレー半島はまだ政治的なまとまりをもった地域とはなっておらず、いくつかの独立国家の寄り合い所帯にすぎなかったのである。したがって、厳密にいえば、19世紀のマレー半島に関する歴史研究を行う場合には、ここのマレー諸国を別々に扱うのがもっとも理想的な方法だといえるだろう。」(ザイナル1983:103) しかしながら、紙幅の制限などもあってそれはかなえられない。そこで歴史家はつぎのようにいう。「そこで、われわれは次に、こうしたマレー諸国をともかくも一つのまとまりあるものにしている要素、いいかえれば、これら諸国のあいだに共通する要素といったものを求める必要に迫られることになる。そして、わたしには、その要素は原住民の文化の中にこそ見いだせるのではないかと思われるのである。19世紀はじめのマレー半島において人口の主流を占めていたのは、インドネシア地域各地から移住してきたマレー人であった。」(ザイナル1983:103) 起源を同じくする人々の文化によって、マレー半島を「緩やかなまとまりを持った一つの社会文化的単位(強調原文)」(ザイナル1983:103) としてあつかうことが可能となる。

実践を生みだし、さらにはそれらの実践においてマラヤという空間が意味をもった単一の空間として固定化されるのである。そしてその過程において、内部における差異や境界線をこえた共通性とは覆い隠されていく。しかしながら、《植民政策学》による認識枠組みをとおして、マレー半島が閉域化された空間とそこに固有の歴史をもつ「マラヤ」としてみなされていくものの、20世紀初頭には複数の「移民社会」から構成される《プルーラル・ソサエティ》というイメージは形成されていなかった。「移民」の大量流入は19世紀には開始していたものの、マラヤ社会の構成要素としてとらえられなかったのである。だが、「移民」をもふくめた「マラヤ住民」の統計学的な数量把握は19世紀末に開始しており、人種主義にもとづくカテゴリーが発明され、修正をくわえられ、改編され、国家の装置に根を下ろしていくようになる。

第４節　「人種」概念の登場

1　人種主義とは

人種差別が新しい現象であることは、たびたび論じられることである(Miles 1989:1993）。関根政美は、「異質性にたいする恐怖、不安、優越性が差別と偏見を生むが、形態学、解剖・生理学的見地、遺伝的特色にもとづいて人種を確定し、その概念を土台に差別や偏見を示すことは、人種概念が確立する近代以降のこと」(関根1994:21)であり、近代以前に着目された指標は、「人種」による差異よりも宗教や生活様式の差異であることが多かったという。

18世紀には人種的ちがいと人種的序列にかんする科学的研究がさかんになりはじめた。ウィリアム・エドワーズの『歴史との関係から見た人類の心理学的特質について』（1829年）、ヴィクトル・クルテの『人間学にもとづく政治学、あるいは人類の哲学的・歴史的および社会的研究』などにより、人種的な差異の遺伝と優劣についての考えが普及した(関根　1994:22)。たとえば植物の分類で有名なリンネも人種にかんする著書『自然の体系』（1835年）をあらわし、人類をアメリカ人種、ヨー

ロッパ人種、アジア人種、アフリカ人種に分類している(Pratt 1992)。また、ポール・ブロカは頭蓋骨の代償と人種集団の文化と能力の差を専門的に研究した。これらの研究につづいて、ゴビノー、チェンバレン、ラプージュによる「科学」を自称する研究が登場し、人種主義的な学説が形成される。

ヨーロッパ人種を中心にして人種集団間の優劣を決定しようとした人種主義的学説の拡散は、19世紀中葉になされたダーウィンやウォーレスらによる進化論とむすびつき、「人種の向上を自然の選択過程に任せるのではなく、より積極的に人為的介入をおこなって人種向上と社会発展を体系的に追求する動きが生まれた」(関根 1994:29)。ここにおいて人種主義が「科学」によって正当化されたのである。20世紀にはいると、この「科学的人種主義」は優生学や民族衛生学として発展し、ナチス・ドイツによる「ユダヤ人」や「ジプシー」等の絶滅政策を生むこととともなった。

2 「文化」から「人種」へ

ヨーロッパにおいて人種主義が展開しはじめる19世紀、マラヤはどのように見られていたのだろうか。前にも述べたように、マレー半島におけるイギリスによる植民地支配が本格化される以前、マレー半島は意味のある空間としてみなされておらず、ヨーロッパ人研究者の目はより広大な地域であるマレー諸島へと向けられていた。その19世紀初め、ヨーロッパ人研究者たちは「人種」的な差異よりは、むしろ言語や文化の差異を強調していたようにみえる。19世紀のはじめの十数年間に、マレー語にかんする重要な辞書、文法書、研究論文などがイギリスにおいてあいついで出版、発表されている。前節において取りあげたように、ライデンもラッフルズも「人種」よりも「文化」や「言語」に焦点をあてていた。

ライデンとラッフルズが言語や文化に着目していたのにたいして、かれらのほぼ同時代の研究者であるジョン・クローフォードは「人種」に着目した。かれはラッフルズのいうマラユ民族の分布地域にほぼ相当する地域をインド諸島と呼び、二つの異なる人種が住む地域として説明した。「インド諸島には（肌の）色の白いもしくは褐色の先住人種と黒人種の先住民がいる」(Crawfurd 1820)。クローフォードに

よれば、このうち前者は海岸部に居住し、マレー語を話し、文明化されているが、後者はマレー語を話さない内陸部に住む「未開人」であるという。

クローフォードによるこの考え方は、ダーウィンとならんで進化論を提唱したウォーレスによる1854年から1862年にかけてのマレー諸島の探検に多大な影響を与えることになった。ウォーレスの考察地域であるマレー諸島とは、クローフォードのインド諸島にソロモン諸島をくわえた地域である。ウォーレスによれば、この地域では、動植物の分布と人種の分布が相似性をなしており、有名なウォーレス線によって二つの人種の分布地域が分割されているという。ウォーレスによれば、マレー諸島にはきわめて対称的な2人種が住んでおり、それは「ほとんどが西半の大きな島々にのみ住むマレー人と、ニューギニアおよびその周辺のいくつかの島を本拠地とするパプア人である」(Wallace 1986:584)。ウォーレスは人種にかんして多大な関心を示していたようで、『マレー諸島』（1869年）では、第40章「マレー諸島の人種」と付録「マレー諸島の諸人種の頭蓋骨と言語について」の二つの章を人種にかんする問題にさいている。

3 センサス

チャールズ・ハーシュマンによれば、クローフォードやウォーレスら19世紀なかばまでのヨーロッパ人の「人種」論は、あくまでも現地の人びとのあいだにおける文化的なステレオタイプや時々の敵意と並ぶ一つの要素でしかなく[5]、この地域においてその後「人種」によってつくられる社会的経済的秩序を構築するまでにはいたっていなかった。ヨーロッパ的な人種理論がもちこまれ、それが実践されたのは、19世紀末から20世紀はじめにかけてのイギリスによる直接的な植民地支配によってであった(Hirschman 1986:330)。

[5]ハーシュマンによれば、1931年のマラヤにおけるセンサスの作成者であるヴリーランドは、東洋人が人種より宗教を重要視していたことを指摘している(Hirschman 1987:565)。ヴリーランドは東洋人に人種の概念がないことを嘆くが、ハーシュマンは、「問題はかれ〔ヴリーランドVlieland〕（と植民地時代のその他の人々）が「人種」をヨーロッパ人によってもたれているポピュラーなイメージとの関係をぬきに定義できなかったことである。アジア人が社会的階層化の基準を欠いていたのではなく、ヨーロッパ人の認識するものとは異なる基準を使う傾向があったのである」(Hirschman1987:565)としている。

ハーシュマンによれば、マラヤにおける「人種」による社会的経済的秩序の構築において重要な役割を果たしたのは、センサスであった。最初の近代的なセンサスは1871年に海峡植民地（シンガポール、マラッカ、ペナン）において実施された。海峡植民地におけるセンサスはその後1881年、1891年、1901年、1911年と続けられた。海峡植民地以外では、1891年にスランゴール、ペラ、スンゲイ・ウジョン（現在のヌグリ・スンビランの一部）、パハンにおいて別々に調査がおこなわれた。1901年と1911年にはマレー連邦州で合同してセンサスがとられた。いくつかの非連合州においてもべつべつに1911年にセンサスがとられた。海峡植民地、マレー連合州、非連合州をあわせたイギリス領マラヤ全体による単一のセンサスは1921年から実施され、1931年、1947年、また独立前夜である1957年にもなされた(Hirschman 1986:559)。

ハーシュマンが明らかにしたことは大きく二つある(Hirschman1986:561)。第１に、イギリスによる植民地支配の進行とともに、センサスにおけるカテゴリーがますます人種的になるということである。まず、1881年と1891年のセンサスでは"nationality"ということばが、人々を分類するさいに使用されていた。"race"は1891年センサスにおいてはじめて登場し、1901年のセンサス作成者は、"race"ということばのほうが"nationality"よりも広くて網羅的な表現であるので、"race"を使用すべきであるとコメントし、1911年には"race"ということばで統一された。

また、"nationality"ということばから"race"ということばへと変換するのにともなって、宗教的な呼称がセンサスのカテゴリーから消えていく。「ヒンドゥー教徒」は、当初「クリン人」「ベンガル人」とならんで存在していたが、1881年のセンサスではすでに消滅している。「ゾロアスター教徒」は「タミル人およびその他のインド原住民」というカテゴリーの下位にあって、「ベンガル人」「ビルマ人」「タミル人」とならんで1901年までもちこたえることになる。

人種主義が人種集団間の優劣の判断をともなっていたことは先にも述べたとおりである。マラヤのセンサスが年代をおうごとに次第に人種的になることの三つめの特徴として、センサスの「人種」別リストのトップをつねに「ヨーロッパ人」が占め、「ユーラシアン」、「中国人」、「マレー人」、「インド人」とつづいていくことがあげられるだろう(Hirschman 1986:571~578)。1911年に海峡植民地で実施され

たセンサスだけはアルファベット順であったが、このやり方は二度と踏襲されることがなかった。「ヨーロッパ人」と「ユーラシアン」の二つのカテゴリーが、リスト上の「その他」の上、「インド人」の下に下がるのは、第二次世界大戦後の1947年になってからである。その後、マラヤが独立したのちは「ヨーロッパ人」や「ユーラシアン」というカテゴリーは、「その他」の下位範疇となる。

ハーシュマンが明らかにした第2の点は、マラヤ／マレーシアの《プルーラル・ソサエティ》を構成する3大エスニック・グループである「マレー人」「中国人」「インド人」と「その他」という分類法がセンサスの実施とともにじょじょにできあがってきたことである。1871年と1881年における海峡植民地でのセンサスでは、大カテゴリーがあまりはっきりしていなかった。しかしながら、1891年に6つの大カテゴリーが導入され、以来1947年までいくつかの例外をのぞいて6大カテゴリーがひきつがれることになる。そのカテゴリーとは、「ヨーロッパ人」「ユーラシアン」「マレー人」「中国人」「インド人」「その他」である。

現代マレーシアにおける「マレー人」「中国人」「インド人」という分類法へとつらなる20世紀初めにおけるカテゴリーの形成は、人種主義的な視線にもとづいた19世紀末以来のセンサスの実施をとおしてなされてきた。だが、このセンサスのカテゴリーがそのまま現代マレーシアにおける《プルーラル・ソサエティ》イメージを生成したというわけではない。センサスにおけるカテゴリーは、マラヤ論やマラヤ史においては不可視であった「移民」も、日本による占領やマラヤの独立を契機にそのプレゼンスを小さくしていった「ヨーロッパ人」も入っている。センサスのカテゴリーの変遷においてみえてくるのは、「人種」によるカテゴリーが変遷をくりかえしながらつくりだされたことであり、そのようなカテゴリーは必然性をともなったものではなく、偶発性においてそのつどそのつど分節化されたということである。その意味では、「マレー人」「中国人」「インド人」という分類方法以外の分類への可能性はつねに開かれているのである。

アンダーソンは、19世紀末のセンサスのもたらした真の革新は、じつのところシステマチックな数量化にあり、そのことが結果として人種主義的なヒエラルキーにもとづくカテゴリーの構築とその物質化をもたらした、と述べている(Anderson 1991:168)。数量化にかんしていえば、植民地時代以前の支配者もその支配下にある

住民を数えようとしていたことはたしかであったが、それは徴税と徴兵の効率的な実施のための住民の把握という経済的・軍事的な関心にもとづくものであった。しかしながら19世紀末には、直接的には財政にも軍事にもかかわらない女性や子供までをも数えはじめたのである。そうして「分類システムの排他的性格、そして数量化そのものの論理からして、ひとりの「コーチシナ人」は、集計可能な一系列の「コーチシナ人」——それはもちろん一つの国家の領域のなかに居住する「コーチシナ人」である——の一つの数(ディジッド)と理解され」(Anderson 1991:282)なければならなくなった。人々を表のマス目のなかに配置していくような分類方法は国家の装置をとおして現実へ作用していく。

> この新しい人口統計学的地形学は、国家がその規模と機能を増大するにつれ、社会的、制度的に深く根を下ろしていった。その想像の地図を道案内として、国家は新しく教育、司法、公共衛生、警察、入国管理の官僚機構を民族・人種的ヒエラルキーの原則にもとづいて編成し、そこにおいてこうした民族・人種的ヒエラルキーはつねに〔センサスにおける〕パラレル・シリーズの観点から理解された。支配下の住民は（こうした民族・人種的ヒエラルキーに応じてマレー人はマレー人、中国人は中国人と）それぞれ別の学校、裁判所、診療所、警察署、入国管理局の網を流れ、この「交通の習性」がやがてもともとは国家のファンタジーにすぎなかったものに本物の社会的生命を与えることになった。(Anderson 1991:282)

アンダーソンによれば、「人種」的ヒエラルキーの制度化は、この植民地の世俗的国家の権威主義的地図にたいして変則的な位置を占めていた宗教的寺院、モスク、宗教的な学校などによって、順調に進むことはできなかったが、それらの宗教的な諸制度も、しだいに政治的・司法的に「人種」化ないしは「民族」化がこころみられていった。植民地マラヤでは、体制が「マレー人」の系列に属するとみなした人々は、宗主国によって去勢された「かれらの」スルタンの法廷にさっさと送られ、そこではかなりの程度、イスラム法にそってことが処理されたのである(Roff 1967:72~74)。

アンダーソンがハーシュマンの議論から考察したように、地図や博物館とならんで、センサスはその後の国民的な想像を可能にするひとつの装置として機能した(Anderson 1991)。すなわち、センサスは人々をどのようにみなすかにかんしての知によって支えられており、この知なくしては、人々はみずからの同一性を獲得することはできないのである。

ハーシュマンやアンダーソンがセンサスの分析をとおして述べているのは、「現地」の人々にはかれら独自のカテゴリー化の方法があって、それにたいして植民地主義がみずからの側の方法を押しつけたということではない。もしそのような「現地」の側のカテゴリー方法があったとしても、林みどりが指摘するようにそれをそのものとしてとりだすことは不可能である。というのも、「接触」ないしは「折衝」という行為が起きる以前において、「現地」と「植民者」というような分類法自体が存在せず、したがって「現地」という「主体」は構成されていないからである。「現地の人々」という「主体」が創造されるのは、「折衝」過程によってであり、同様に「現地」の側のカテゴリー方法も折衝過程をとおしてである。ある一人が分類の表の一つの項目のなかに確実に帰属しており、複数の項目にまたがっていたりどの項目にもあてはまらなかったりすることが決していないという、センサスの考え方じたいを前提としない、「まったく異なる」見方は、折衝の領域において痕跡としてかろうじてみることができるにすぎない。「まったく異なる」ものは、分節化の過程において抑圧されてしまうのである。

つぎの節では、「マレー語」という民族語が実定的に分節化されるプロセスが同時に、言説によって分節化されていない「知覚する」このとの不可能な諸「差異」を抑圧していく過程であることをみていこう。

第5節　マレー語研究の誕生

1　辞書の登場と統一体としてのマレー語という思想

初期のマレー語研究は、ヨーロッパ人によるマレー語辞書の編纂作業にともなって開始された。マレー語辞書の歴史のはじめの3世紀は、マレー語とヨーロッパ語による二言語辞典の歴史であり、マレー語をマレー語で説明する単一言語辞典の登場は、マレー語を自らの言語と考える人々が辞書の編纂作業に参加する時になってからであった。ラッセル・ジョーンズによれば、はじめてのマレー語の辞書はCasper Wiltensにより編集され、1623年に出版された(Jones 1984: vi)[6]。

1701年には、はじめて英語によるマレー語辞典（英語マレー語、マレー語英語）がトーマス・バウリーによって編纂されロンドンで出版された。ただし、イギリス人研究者によるによるマレー語研究という点で見ると、18世紀における研究の蓄積は少ない。当時この地域の大部分においてオランダが優勢であり、イギリスはスマトラ島のベンクーレン以外にこの地域に拠点をもっていなかった。イギリスによるマレー語研究が盛んになるのは、イギリスがこの地域に再び介入し始めた時期と一致している。スタンフォード・ラッフルズやＪ・ライデンによるマレー語にかんする重要な研究とともに、バウリー以来百年ぶりに完成されたマレー語の辞典が編纂されたのもこの時期である。これはウィリアム・マルスデンによって編纂され1812年に出版されたマレー語英語、英語マレー語の辞典であり、その約百年後にウィルキンソンの辞書が出るまで、一定の権威を保ち続けた[7]。マルスデンの辞書にはネイティブによる作文のフレーズや、文章の例、アラビア文字によるマレー語の書記であるジャウィによる綴りが掲載され、バウリーとは異なり語幹 kata dasar から引くという特徴を持っていた。語幹から調べるという方法はその後の辞書にも引き継がれ、マレー語辞典の規範形式となった。辞書編纂作業は必然的に文法研究を発展させ、辞書と同時にマレー語の文法書がマルスデンによって著されている。マルスデンの辞書はのちにオランダ語とフランス語にも翻訳され、ウィルキンソンによれば、マルスデンの辞書はRoordavanEysiga（マレー語オランダ語）、Klinkert（英語マレー語）、Pinapple（マレー語オランダ語）、Von Dewallらによる辞書の編纂にも貢献し

[6]ライデンはDavid Haexによる文法の注釈つきのマレー語とオランダ語の辞書を最初の辞書としてあげている。ただし論文ではラテン語版の出版年の1631年だけが記されている。また、辞書登場以前にはワードリストがあったが、ワードリストは語彙数も少なく、ローマ字綴りに法則性や一貫性がなく、辞書のようにマレー語文法の研究にもとづいていたわけではなかった。

[7]マースデンの前にホウィソンによる辞書が出版されているが、アラビア文字によるマレー語表記に問題があるなど、評価は低い。

た。

マルスデンの辞書の評判は良かったものの(Jones 1984, Abudullah 1967)、19世紀後半にはすでに手に入りにくかったようである (Jones 1984)。 20世紀はじめには、マレー語習得が必須であったマラヤ公務員のマレー語学習のために政府が渡した辞書はフェーヴル Favre によるマレー語とフランス語の辞書であった[8]。ウィルキンソンが百年ぶりのマレー語辞典の編纂を決意したの背景には、こうした辞書をめぐる事情があったようである。ウィルキンソンの辞書は1901年から1903年にかけて出版され、マレー語辞書のスタンダードとなった。また、この辞書において確立されたマレー語のローマ字の綴り法は学校用綴り方法 ejaan sekolah と呼ばれ、独立後に Dewan Bahasa dan Pustaka が綴り方を改良するまでマレー語学校において使用された (*Memoranda* 1985)。ウィルキンソンはほかに口語体の辞書を編纂している。また、ウィルキンソンの同僚でかつ有名なマレー学者であるリチャード・ウィンステッドも英語マレー語辞典と口語辞典を編纂している。

17世紀から20世紀前半に至るまでのマレー語辞典の出版の歴史を大まかに見てきたが、それではいったい、辞書の登場は何を意味するのだろうか。辞書の登場は、言語にたいする新しい見方の登場を意味しているといえないだろうか。つまり、言語の広がりは空間的にかぎられており、その言語の体系は閉じられているという考え方である。辞書は、それを目に見える形で示した。というのも辞書は、どんなに分厚く数巻に分かれていたとしても、かならず完結している、もしくは完結していなければならないからである。アルファベット順に並べられていれば、Aからはじまり最後はZで終わるようにできている。このような辞書の物理的な閉止が人々に可能にしたのは、辞書が対象とする言語の広がりがかぎられているという認識の方法である。それは、ある言語のすべての語彙が一冊（もしくは数巻）の辞書の中に規則正しくきちんと並べられているはずであり、辞書に収められていない言葉は、異なる体系をもった異なる言語のものであり、別の辞書に収められているはずだという想像である。完成されたマレー語の辞書の誕生によって、かぎられた空間に広がるひとつの体系をもった言語としてマレー語を想像することが可能になった[9]。

[8]そのほかに渡された二冊はマックスウェル、スウェッテナムによる辞書。

[9]ベネディクト・アンダーソンによれば、ヨーロッパでは、辞書の登場を可能にする新しい言語観は、出版資本主義と非ヨーロッパの古代言語の研究の進展による聖なる言語の地位の降格により、聖なる

また辞書の編纂が二つの言語のあいだにおいておこなわれたということも示唆的である。すなわちある言語の全体性の構想は、他の言語の構想と同時進行であるということである。酒井直樹は、翻訳に先立って統一体としての言語が前もって措定されているのではなく、翻訳という行為をとおして、ある統一体としての言語とそれとは別の統一体としての言語というものが、事後的に分節化されることを示している。「ひとつのテクストを別のテクストに翻訳あるいは通訳しなければならないのは、二つの異なった言語の統一体があらかじめあるからではなく、翻訳の行為が言語を分節化し、その結果、翻訳の表象をつうじて、あたかも翻訳する言語と翻訳される言語の自律的で閉じられた統一体が存在するかのように、それらの言語を措定することができるような制度が成立することになるからなのである」(酒井1997:4)。辞書を編纂する行為とは酒井のいう翻訳の実践と同様に、言語を分節化し、あたかも翻訳する言語と翻訳される言語であるマレー語を実定的に定立するのである。

2　折衝の痕跡

ヨーロッパによる非ヨーロッパ世界の記述のもつ暴力性について、林みどりはつぎのように述べている。「ヨーロッパ人観察者とそのテクストの権威は、非ヨーロッパ世界を異なる思考体系のなかに暴力的におしこみ、その思考体系の内部で理解し、分類や分析の可能な対象として客体化し、かつそうした客体として表象することのなかに、その権威の源をもっている。植民地主義的言説は、この権威のうえに構築される＜観察し記述する主体＞と＜観察され記述される客体＞の絶対的な二項対立からなるヘゲモニー関係を固定化する」(林2001:145)。しかしながら、同時に林はつぎのようにも問うている。「はたして非ヨーロッパ世界は、そのような客体として成功裏に表象されえているだろうか」と。現地の人々との接触の場の記述においても、「いわばどうでもいいことがらとしてテクストの余白に書き付けられていたり、偶発的な出来事として前後の叙述と有機的に関係づけられずに書き流されているだけのこうした接触の場の記述においても、はたしてコロニアルな表象は貫かれているだろうか(林2001:145)」。接触の場の記述では、植民地主義的言説において、遅れ

言語も俗語も（非ヨーロッパの言語さえも）均質で空虚な時間によって調和させることができると考えられるようになったことに由来している(Anderson 1991)。

た住民と表象されるような人々の力に依存する書き手自身の姿をさらけださずにはいかないような場面があるという(林2001:147)。

前述したように、辞書の編纂作業は、ある言語をひとつの統一体としてみなす認識方法によってなりたっていたが、その一方で、マレー語の状態があるべき統一的な状況からかけ離れていることを認識する作業でもあった。19世紀初頭のマレー語辞書編纂者であるマルスデンは、マレー語というひとつの名前によって形容された言語が、地域ごとに大きな差異を抱えていること、同一地域でありながらも身分や階層もしくは場面によって異なる語法、語彙がつかわれていることに直面する。マルスデンの辞書編纂作業は、言語を空間的・体系的に閉じられたものとして認識することによって開始され、かつ一つ（ないしは数巻）の閉じられた辞書を完成させることとでそのような言語の閉域性を物理的に提示しなければならない。しかしながら、実際の作業はそのような前提を裏切りつづけるのである。

マルスデンは、1812年の文法書の序の部分において、マレー語の広がりについてつぎのように定義している。「マレー語〔この当時英語ではMalayanが使われていた〕はネイティブたちの言葉でいうところのムラユ語〔当時の表記ではMalayu〕は、東インド諸島と大まかに定義される地域に広がっている。この地域は今でいうところのマレー半島とスマトラ、ジャワ、ボルネオ、セレベスの島々とそのほか数え切れないほどの島々、東は香辛料諸島と呼ばれるモルッカ諸島、南はティモール島、北はフィリピン諸島までを含むマレー諸島」(Marsden 1812:i)である。「マレー諸島の島々のうちとくに大きい島とマレー半島では、それぞれに特徴的な諸言語があり、内陸部の住民たちがそれらの諸言語を話しているものの、その一方でマレー語は、海岸や河口、河川沿いの地域で一般的に使用されている。マレー語は商業や外国とのやりとりの媒介となる言葉であり、どんな民族であっても交易をする人はこの言葉を使って商取引をせねばならず、〔中略〕〔マレー語は〕東洋におけるリンガフランカである」(Marsden 1812:ii)。

しかし、マレー語というひとつの名前を戴いているものの、それは広大な地域に広がっており、地域ごとに格差がとても大きかった。マルスデンもそのことを認めて次のようにいう。「マレー半島とマレー諸島の多数の島々で話されている言語の一般的な統一性は顕著であるが、それでもとくに母音の発音にかんしては方言の差

がある」(Marsden 1812:vi)。辞書に採用される言葉はスタンダードでなければならない。マルスデンはマレー語辞典の序文において、マラッカとジョホールで話されている言葉をマレー語の標準語として採用することにした経緯を述べている(Marsden 1812:vi)。スマトラ島の南部ではジャワ語の影響が大きすぎること、ミナンカバウはマレー人の起源の土地であり、言語のオリジナルな純粋性の探索には理想的であるが、ミナンカバウにかんする古典知識の不足と古典文献そのものの不足とから採用を見合わされていること。こうした理由からマルスデンはマラッカとジョホールのマレー語を標準語として辞書を編纂した。しかしながらジョーンズが紹介する逸話では、その判断が正しかったかどうかについて辞書出版後もマルスデンは悩んでいたという。

マルスデンにとってマレー語はひとつの統一体でなければならず、マレー語の広がる空間にはかぎりがあり、マルスデンは、その範囲を正しく見定めなければならないのである。さらに、マレー語というかぎられた統一体の内部に方言としての差異を認めるとしても、スタンダードなマレー語をどこかに見定めなければならない。その見定めは、作為的であってはならない。言語の境界は自然に決定されているはずであり、オリジナルな言語というものがあるはずなのである。その自然の法則のようなものをマルスデンは見つけなければならないのである。

ジョーンズによればマルスデンは辞書の出版後にジョン・クローフォードに手紙を送り、マレー半島のマレー語が普通のマレー語なのかどうかという質問をしたという。それにたいしてクローフォードは、あなたの辞書のなかのマレー語こそがベストのマレー語なのだと返事をしたという。「あなたはわたしに半島において話されるマレー語が標準のマレー語と異なるのかとお尋ねになりましたね。ほとんどありません。最良のマレー語とは、あなたの辞書のなかに編纂されて注釈を与えられているマレー語です。そしてすべての差異は地域的なものにすぎません」(Jones 1984:xvi)。

ジョーンズはこれをクロフォードによるマルスデンの辞書の賛辞と読んでいるが、ほかの見方もできるかもしれない。「最良のマレー語とは、あなたの辞書のなかに編纂されて注釈を与えられているマレー語です」というクローフォードの言葉は、おそらく二とおりのしかたで読むことができる。一つは、マルスデンが最良のマレー

語を正しく見さだめて辞書を作成したという意味においてである。そこでは、統一体としてのマレー語という考え方には一部の揺らぎも生じない。しかしながら、マルスデンの辞書に採用されることによって、辞書のなかのマレー語が最良のマレー語となるのだ、と読んだらどうであろうか。そうであればクローフォードは、辞書編纂過程なるものが、あらかじめ自然に存在しているマレー語という全体性を明らかにすることではなく、むしろマレー語を全体性としてつくりだしていく作業であるということを、期せずして指摘してしまったことになる。さらにクローフォードは「すべての差異は地域的なものにすぎません」ということで、 すべてのマレー語を辞書に閉じこめることの不可能性をも指摘してしまったのである。マルスデンの辞書に入っているのは、最良のマレー語かもしれない（もしくは辞書にはいることによって最良のマレー語と地域的なマレー語が区別されるのかもしれない）。しかしながら、辞書に収まりきらない雑多なマレー語があり、それらのマレー語は編纂者の手によって完全にコントロールされていない。できあがった辞書はマレー語という完全に縫合された全体性を達成することができないのである。クローフォードは、辞書の編纂にあたるマルスデンが遭遇しながらもそれとしてつかむことのできない不安を、それとは知らずに言いあててしまったのかもしれない。

マルスデンの辞書編纂作業における接触の場の記述として、もうひとつあげることができるだろうか。それは、マルスデンが、マレー語内部における階層による差異について説明しようとする場面においてである。

> その言語〔マレー語〕の（方言というよりはむしろ）さまざまなスタイルを区別する〔マレー語での〕用語がある。それはこの同一の国において異なる地位や階級の人々によって話される言語のスタイルである。bahasa dalam、bahasa bangsawan、bahasa dagang、そしてbahasa kachuk-anというのがそれである。(Marsden 1982:xv)

この分類は現地民による分類で、bahasa dalamというのは宮廷において話されることばであり、bahasa bangsawanは貴族のことばであるとマルスデンはいう。

> bahasa dagangは、その用語が暗に示すところによれば、港から港へと貿易をする商人のことばである。かれらのことばは構造が単純であり、話し方が明瞭で、そのような特徴は商売上の取引によって要求されるのである。しかしながらbahasa bangsawanに比べるとあまり優雅ではなく文法的でもない。このことばは取り引きする商品のために多くの外国語の使用を不可避的に許容している。ヨーロッパ人紳士が話していることばlanguageはこの分類に属していると考えられている。(Marsden 1812:xvi)

商業語 bahasa dagangが優雅ではなく文法的でもないという指摘は、マルスデンがみずから観察しておこなったものではなく、現地の人々によるもののようである。ここで興味深いのは、「ヨーロッパ人の紳士たち」が話すことばが、商売の取引の現場において「あまり優雅でも文法的でもない」ことばである商業語に分類されてしまうということをマルスデンが述べていることである。すなわち商取引の場におけるまさに折衝において、「ヨーロッパ人紳士」の話すことばが、現地の人々によって低いランクとしてみなされているというのである。マルスデンにとってそのことはゆゆしき事態なのだろう。「ヨーロッパ人」は現地人より「優秀」で「優雅」でなければならないはずであり、そのことを現地の人々が認識していなければならないはずである。しかしながら現地の人々との接触の場面において、「優雅なヨーロッパ人紳士」の地位は揺らいでいるのである。

そこでマルスデンは「しかし」とつづけ、低ランクに位置づけられたヨーロッパ人についてかれらが政治的な能力によって現地の人々に尊敬されているのだとつけくわえる。だが、政治的な能力は港における現地の人々との商取引においてあまり効果を上げていないようである。というのも「かれらのことば遣いがかれらの地位に一致しているとき、かれらは貴族のことばを使うはず」だからである。下品な言葉を使う外国人は、それに相応のあつかいをされたのかもしれない。マルスデンはその辞書を「マレー語のイディオムとことばづかいをマスターしたいと願うヨーロッパ人の使用のために」編纂した。すなわち、マレー語をマスターしなければ港で商いをする得体のしれない商人と同等にあつかわれるからである。

ここでは、観察する「主体」である西洋の位置に揺らぎが生じており、植民地主

義的言説の支配の記述は完遂していない。折衝の場において、「政治的能力を持つ」はずのジェントルマンであっても、「現地民」の判断に身を任せなければならず、下品か上品かを判断するのは、西洋人ではないことがかいま見えるのである。

ここにはもう一つ問題がある。bahasa dalam、bahasa bangsawan、bahasa dagang、bahasa kachuk-anという四つの"bahasa"（言語）が、はたしてマルスデンのいうようなマレー語の内部の階層別の分類なのかという問題である。辞書編纂者のマルスデンにとっては当然である民族語という概念は、19世紀初めのマレー半島において確立していただろうか。第3章においても見るとおり、当時の人々は、ある個人がある一つの言語体系に属しているはずであるという考え方をしていなかった。そうであれば、それらの人々はいったいどのような感覚をもっていたのかということが疑問にされるだろうが、何度もいうように近代とはまったく異なるそのような感覚をそのままとりだすことは不可能である。というのも、民族語という概念は近代人の思考の隅々にまでしみわたっており、まったく異なる原理を想像しようとしたとたんにすぐに統一体としての「民族語」や「現地民」が分節されてしまうからである。わたしたちは、マルスデンのように「民族語」という発想からしか「現地」の人びとの言語観を見ることができないのであり、bahasa dalam、bahasa bangsawan、bahasa dagang、bahasa kachuk-anを「民族語」としてのマレー語の下位区分としてしか分類せざるをえないのである。だが折衝の場では、マルスデンによって「民族語」という考え方へと翻訳されるときに抑圧されてしまう「異なるもの」の痕跡が、支配的言説の和音にかすかな雑音をのこしている。「われわれ」の分類法とはまったく異なるために、記述することも不可能ななにかが、林のいうようなグランジ grunge として、植民地主義的言説の織りなす布をほつれさしているのである。

マルスデンは、商業語 bahasa dagang が商取引のために多くの外国語をふくみ、ヨーロッパ人紳士が話すことばもこれに分類されていると述べている。だがなぜヨーロッパ人紳士が話すマレー語とはいわずに、たんにことば language とのみ述べているのだろうか。それは「現地」の人々がいうところのbahasa dagangが、わたしたちの考えるところの「外国語のまじったマレー語」だけではなく、英語やオランダ語などのヨーロッパ人が話す（マルスデンの考えでは民族語であるような）ことばをもふくんでいるからかもしれない。インドや中国、遠くはアラビア半島からの船が

行き来する古来からの貿易の中継地にあって、さまざまな地域からやってくる人々が話す雑多なことば。商業語 bahasa dagangは、港を通り過ぎていくそれらの人々を統一体として想定できないように、一つの体系をもったことばを意味していないのかもしれない。マルスデンは、「民族語」の発想の域を越えてしまうそのような「現地」の側の言語観を書きとめてしまったのである。マルスデンは「現地」の人々による見方を完全に翻訳しきれずに宙吊りにして、読者に言いしれぬ不安感と納得のいかなさをもたらす。それによって植民地主義的言説による織物にほつれやかぎ裂きを残すのである。

《植民政策学》の時代には、「マラヤ」という後の独立国家につながる空間が独特の意味をもって認識されるようになり、そのような認識方法は《地域研究》の時代における《マレーシア研究》へと基本的には継承されていく。しかしながら《植民政策学》では、マレーシアを《プルーラル・ソサエティ》としてみなす見方はいまだマラヤ論やマラヤ史というかたちではっきりと提示されていない。

その一方で移民たちはセンサスによって数量的に計測されはじめていた。これはマラヤという政治的な領域に居住するすべての人々をくまなく把握するシステムである。センサスは人種主義的な知識にもとづいて発想され、改編をくりかえしながら、政治的・社会的なさまざまな装置をとおして植民地の社会を人種主義のヒエラルキーにもとづいて編成した。そこから、現代のマレーシアにおける《プルーラル・ソサエティ》イメージを支える「マレー人」「中国人」「インド人」というような区分のしかたが生成されてくる。ファーニヴァルによる有名な《プルーラル・ソサエティ》論の登場も、おそらくはこのような植民地における人種にまつわる知的基盤を背景としていたのであろう。だがファーニヴァルによる議論の検討へ移る前に、いましばらく、《植民政策学》における現地へのまなざしについての考察をつづけよう。